低温・日照不足に対する農作物の技術対策について

令和元年７月１２日
埼 玉 県 農 林 部

１　天候の見通し

７月１１日気象庁発表の１か月予報（７月１３日から８月１２日までの天候見通し）では、オホーツク海高気圧からの湿った空気の影響で、期間のはじめは日照時間が少なく、気温の低い状態が続く見込みとされています。

これまでも、各作物は低温と日照不足の影響により、生育が遅れるとともに軟弱に生育していますので、今後の栽培管理に注意しましょう。

２　技術対策

（１）水　稲

○早期栽培では、低温の影響を受けやすい穂ばらみ期に入っているため、最低気温が２０度以下の予報が出た場合は深水管理を行う。

○病害虫防除所が発表するいもち病（葉いもち）感染好適日条件出現状況に留意し、薬剤の予防散布を行う。

（２）野菜類

ア　野菜類全般

○曇雨天時の摘葉や芽かきは、病害の感染を助長するため極力避ける。

○樹勢を維持し生理的落果や病害虫の発生を予防するため、天候を勘案しながら老化葉は除去する。

○天候やほ場の状態を勘案しながら、薬剤の予防散布を行う。

○追肥は生育状況を観察しながら多量に行わず、１回当たりの量を少なくして回数を多くする。

イ　ねぎ

○畝間が滞水した場合は、早期に排水対策を行う。

○土壌水分が過多な場合は、無理な土寄せは避ける。

○黒斑病、べと病、さび病などを対象に薬剤の予防散布を行う。

ウ　なす

○畝間が滞水した場合は、早期に排水対策を行う。

○菌核病、灰色かび病などを対象に薬剤の予防散布を行う。

○摘葉や摘果した葉や果実は、ほ場外に搬出し衛生に努める。

エ　いちご（育苗）

○軟弱徒長や根傷みを防ぐため、親株床や鉢土の表面が乾くまでかん水は極力控える。

○ハウス内が過湿にならないよう、換気扇や循環扇を積極的に活用し換気を行う。

○曇雨天時は遮光資材を巻き上げ（あるいは撤去）、可能な限り日射を確保する。

○軟弱徒長気味の苗は、急激な日射に遭遇すると萎れが発生するので管理に十分注意する。

○炭そ病、うどんこ病を対象に薬剤の予防散布を行う。

（３）果樹類

ア　果樹類全般

○滞水しやすいほ場は、明渠による排水対策を講じ、根の活力低下を防ぐ。

イ　なし

○曇雨天が続く場合は、１０日に１度の殺菌剤の予防散布を継続する。

○黒星病の発病果は摘果し、ほ場外へ搬出し衛生に努める。

○ＥＢＩ剤は効果が高いが、薬剤耐性菌の発達が懸念されるため、年３回までの使用にとどめる。

ウ　ぶどう

○曇雨天が続く場合は、１０日に１度の殺菌剤の予防散布を継続する。

○黒とう病の罹病果実や罹病葉、罹病新梢は有力な伝染源となるため、園外へ搬出しほ場の衛生に努める。

○ＥＢＩ剤は効果が高いが、薬剤耐性菌の発達が懸念されるため、年２回までの使用にとどめる。

（４）花き類

○露地栽培では過湿により、根張りの悪化や下葉の黄変や枯れ上がりが心配されるため、排水対策（明渠）を徹底する。

○施設栽培では過湿により灰色かび病などの病害の発生が助長されるので、施設周囲に排水溝を設置し排水対策を行うとともに、雨天でも換気を行う。

○軟弱ぎみに生育した場合は、極力光に当てて追肥は控える。

＜農薬使用上の注意事項＞

１　農薬は、ラベルの記載内容を確認し、適正に使用してください。

２　農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。